二〇二五年七月四日

渓流の高鳴りに覚む登山小屋　山椒
獣医へと炎熱の道急ぎけり　むべ

二〇二五年七月三日

老いの歩に合はす犬の歩朝ぐもり　なつき
蛸壺の全身貝殻まみれかな　澄子
濡れ縁に簾めきたる凌霄花　むべ
青嵐五重の塔の傾ぐかと　愛正
紫陽花の苑ウエルカム花手水　康子
蓮池の風通ひくる寺縁かな　なつき

二〇二五年七月二日

灯ともせばいつもの守宮厨窓　明日香
日焼け子の疲れ知らずの笑顔かな　なつき

二〇二五年七月一日

緑陰のベンチに集ひ福音歌　勉聖
余念なき野草観察夏帽子　澄子
川涼し葦の葉擦れの音もまた　藤井

二〇二五年六月三〇日

広芝に児らの白靴はじけをり　せつ子
音立ててちぎるレタスや朝の膳　康子
喬木の天辺めざし夏の蝶　せつ子

二〇二五年六月二九日

昼寝の子布の絵本を腹に置き　なつき
糠床に漬け込む棘の胡瓜かな　うつぎ

二〇二五年六月二八日

夏蝶のゆくてに青き富士の嶺　勉聖
水打ちて玉砂利に綺羅生まれけり　康子
夏蝶も吾もひと休み大庇　むべ
腰下ろす上り框の梅雨湿り　澄子

毎日句会みのる選・二〇二五年七月六日